



俳諧

一葉塚

全三冊の内上巻

山嵐雪五十回已迄著

甘藤路先

南法亭

碑銘并序

嵐雪翁姓服部、號雪中菴、明曆
乙未、生於淡州小椋、並鄉、天資
秀敏、常遊思于竹素、縱志于泉
石、後移居東武、從芭蕉翁、學誹
諧之連歌、奄得其真、終為一世

之名家矣、夫誹諧、濫觴於寬平、
經星且千、近世京師、有貞德者、
始效連歌之新式、造體制、謂之
紙諧之連歌、是皆誹屈熾於、登
芳銜華、鳴于世者甚夥矣、所源
遠支分、終失雅正敦厚之風者、

不為不多、蓋誹風之變態也、蕉
翁憂被纖工害質、虛浮流華、自
唱溫厚淡薄以導之、於是向之
流弊漸歸正焉、雖癸白雲調高、
陽春味稀、棕頰升堂者、不過數
子、其粹者、世稱之芭蕉門下之

三雋、而雪翁其一也、雪翁造句
精微、閑曠、情之所寓、隨錦隨繡、
乃揭其風、鼓以大唱、於是海內
喁喁、大和、方今家吟戶詠、而不
宗、莫翁者、百而一而已、然則雪
翁之功、其大也哉、寶永四歲孟

冬十三日、卒於東武、歲五十四、
葬駒込常驗寺、建墳追號不白
翁、今歲憲曆百子、歷年已五
十、翁之令姪、乙貫、虎州兄弟、亦
好紙、楮、各有翁之庵、將建碑於
淡州、屢予誌之、嗚呼、其歌咏、勇

予性情、發于聲音、可以憤、可以
恨、排、齟、亦然、予與雪翁、不同世、
而誦其辭、足以想、看其人、豈有
無實而至、此妙者乎、是予之所
不顧、彼蹇、敢操翰也、且嚴父嘗
在東武、與雪翁相識、然則於予

何、藹然乎、銘云

鏘兮、翺兮、璞玉、渾金
誰揮、雲斧、絃耜、錦心
芳聘、遠邇、藻占、古今
惟碑、惟銘、永傳、遺音

皇都

矯亭藤野氏熙數馬謹誌

相之結體美之讚佛亦其固
多結之能結もまの結は終末
結は終末の風人香中養結
其の結は終末の結は終末
其の結は終末の結は終末
其の結は終末の結は終末
其の結は終末の結は終末

白七也乃性の白く集一
しう可との平く集くちを其
をいしつて解さる性也
宜あしすや誠子能中一の仁
了し幸一痛活乃愛ふふ
あしは物悟^テを^タ受^フて^テ又^ニね
其^ハ活^ノの^ハむねは^ハ集^約め^テす

志十由のあしん其南高貴州の
子^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一
活好^テを^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一
乃^ハ村^多甫^の活^乃活^乃も^ハ集^約す^一
を^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一
を^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一
を^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一を^ハ集^約す^一

情、多、み、難、く、老、如、乃、二、如、此、
 之、正、油、も、ち、る、各、是、如、此、也、
 端、よ、り、り、る、も、如、此、也、

丙子仲冬 南法書

辞世

雪中卷

嵐雪

一葉ちり

吐一葉ちり

風乃三

追善 歌仙

五十子流乃夏乃人冬の蝶 松牛

参りもこれ本陰雪の洞浮樹 乙貫

茶の必飲多と力又山越エ 花來

鹿をくもむ石筆の鞘 虎州

あふりし釣舟より亭此月 守中

門くめり此燕の留お 長穂

遠近としてふと菊乃出振花 乙貫

たきとよまきし渡道の宿母

怪氣とはいして割膝器ろた 花來

きし果して江戸と葉内

看板のありく雨し下向道 長穂

梅下本と床机とくはく

言もみ敷いふやと淋し秋の奥 虎州

盗心薬とちかく厚も入

拾とち此ハ雀乃がう一藝 乙貫

若是起るの孝下系と醉

公家流の足とまじし在れ流房 花來

春の奢ハ京ハ登り此氣

春の奢ハ京ハ登り此氣 長穗

春の奢ハ京ハ登り此氣

春の奢ハ京ハ登り此氣 虎州

春の奢ハ京ハ登り此氣

原一とて存入端は川嵐 乙貫

原一とて存入端は川嵐

干之賣の佛氣生よ飽る顔 花來

干之賣の佛氣生よ飽る顔

是と粟ひらふ業に振る巻 長穗

是と粟ひらふ業に振る巻

あまのめて居ると思ひの故文 虎州

あまのめて居ると思ひの故文

鶉毫と蓬萊山のたいこ持 乙貫

朽きぬまの石の室殿 長徳

丸鏡くらりるまのとりかり 虎川

緩さく考ふさめれ精と妹 花來

花より肉とせし氣の天下晴 乙貫

草一草一もる後の山く 執筆

追善

この乃相如ハ橋柱よ凱一
あんののこ馬と海し帰以
我祖嵐雪を胞の衣服部
の家と出て蕉門よ入証
宗望と此は歸よう角
るは青雲のやとく風雅の
一徳との隣あるをや寒き
雪中菴よ天と終るま
既よ今とくふ十回と帰

懐旧の句と諸母とよむと
わく一帙とるは是とよむ
くし膝とるは是とよむ
くし膝とるは是とよむ
くし膝とるは是とよむ
くし膝とるは是とよむ
くし膝とるは是とよむ
くし膝とるは是とよむ
くし膝とるは是とよむ
くし膝とるは是とよむ

五十韻 獨吟

多九堂

多九堂の矢数羽とけの十夜哉 乙貫
徳の風をりる子れの松

水乃きへ通じ即積信工
實はくし城とつと相續
車座より門をりる物清孝
欠の底と入てり尻
山くきふ在明の神若石
萩は心なきくまらる
唐綿仕るの囀のま回娘
子乃道とるは是とよむ

前帯此の今もよせらるる後つきの
袷漿付して袷袴の馴れぬ
泣袖ふたりの扇乃よふと席
昔鬼打ハ晦日乃月
任吉て尺も無岩戸のぬき
ぬ氣と知く扇以昆布羹
井月ハ暮乃皮切乃交れ点
縁りいふことまたぬきて香

寫乃心と枕出て河成れ者
居りし舟ハ蜈蚣之人
襦袢て着ることを花乃ハ重き
嵐と旅ハ風中れをまつ
懸し河ハ傳集りて百千を
姿ハ葉乃龍よ菴年
すみ濁れ田毎れ水乃流れ
子路乃茶を君ハ負途

あつめぬの雲にほきてしる鳥
雲間くくよ星の垣る見
おぐもよけぬお涙た下向
布袋よ汗をかきし行樂
杉葉を吹かぬ風も振るく
脚きくくくハ山雀と燕
月とくくくもきくく十八
く流く稲ハ豈くの一礼

世渡りとは川越の肩次
沓と冠よした張良
常流く風と木をれ伽なり
同じくゆれ程の旧跡
虎の尾と見て関所及るを
そく鉄炮よ入性根知
阿ふふは老本よ若くは
天下一枚厚の毛 穰

涼しき此果を世の珍味
やぶ醫者老ととも生れ墻
大とまゝくうそ火は神水の底
文行方なきやきし川
来飛肺中流るるを目澄
流の漏りたることと解さぬ
花の莫介田舎よ京の奥なる
文よ呼きてあふ山彦

迎福歌仙 獨吟

鶴子亭

入十年や花の細く日の小春 虎州
雪れ子の啼てよい空
曲後さうゆゑ水より組て
砂掃風の後よ身揮ひ
指周板存の子まよき果せ
草のまのまはくく白あ

7
潮をいし柳をいし舟は水のみ
病をいしとも名の知れぬ舟
武蔵野の原をいし人とともいし時
浪をいし舟は音響も止
澄原乃氣と妻妻の浪治
舟着津存の舟を我れ
飛車角の道は浪川大和川
引き舟は舟の流し舟方と

是古乃山と名ふて名を延び
花咲せりひ興もも之経
雲、舟乃浪うし舟く浦の去
節遠よ舟七舟八舟四ッ暗
根菜根家十代と代を飾
飽とて斗搔切と世の中
道満と尻と押とて舟打
乗名、舟と長い小便

岐山人の嫉し身請の金此年
是より書てけしと子船
蕨生しと後石より以氣も足
二輪部もきは又暖い梅
其日限春の懐の東山
高きと一恙星を存
是をわの形より好くうやま
茶のひり星踏はれも出ぬ

竹菴の換茶の本奥と町止
清水と聞え結るぬ
茶のこして我身とるは以程の手
塵吸玉ハ玉乃たまし
夜是は時代前繪の花此山
呂津の好も以莖蒲公英

上

十

懐舊

嵐雲ハ家ノ國と去て去り
蕉翁の瓢を端に湖中此仙
遊入す年以事連絡とと
周く雪中菴と流布染と
しと彼載憑る座と重なる
此等しうらんや今在母
あつたは乃沈袋と積て阿兄
乙母へと共よ法英子の向
と公しりてあまこと不白云峯

乃墳一備えて於一族の末

長く此法い少く業新とと

い乃此とのを

風や世よ鳴るく小春たうとこ中

虎洲

い法となく善を獲るま小春哉

松牛

う法まうり此姿を向此水哉

漆苗

五十季のんうり此花やを橋

長穂

止

十一

其角嵐雪乃六十回忌
時とたけうふい事と感と
るよかの左右れよと交よ
合掌してゐると吊る

此れとよや世の念きは百握り 乙貫

その向ふ那互角の雪は雪の續き 虎州

雪の積一本根をその向ふふ 花來

津浪波

嵐雪英師乃六十回
追慕多し修りたる

樂水軒

吏丁

一睡子

天命成初以

一色とが

彼雪吹

全

行記

被毛

拂毛被毛

懐心卷四

洲本

一陽乃夏やの角ぬふ十年 寒露

嵐雪仙翁のまゝと云ふ
此れ日貴州乃こ子布の
集と作らるる事

同

花若雪懐ひ知るる冬櫛 眉長

遠忌

同

自ら雪被ふ重きけ日ふ 不席

上

十三

玄峯居士于回忌と
吊入上流花家うれをけて

洲本

手向うは是を八手乃流れ軸 雨山
雪と降うると淋し時多月 武香

このうらぐ貴き秋と渡る
といふも程も光こしハ

扇如水八洞きくをし一星の歌 不周
雪とやうと手向うの中は木の葉多 如蘭

懐 齋

今降るとむしうこれ冬の時多 其心

古墳と流し時多乃手向うの形 野笛
夢ありし葉は花もよみ十夜 魚巾

幸 忌

去るものよ流れ水もやき時多 嵐笛
玉乃急を昔よ流し一敷か 鴉喉
初まやも生れ愛も一雨も 五帛

懐 齋

茶ハ花よ成て同流や沙昔 莠

止

廿四

遠忌

洲本

花の心出た人そ十束の形来 風也

風と椽、綿乃多向、雨平

柔乃茶や追資ま向中 芦水

懐高

初雪より経たるを叫や向山 壺氷

とやいそ吐て世より秋の葉 梅方

その流汲川者の何多、水 芦葉

雪中菴主人乃

八十回代中

福良

五十年 表紙にありて言葉の形 松齋

嵐雪翁と述懐して

八幡

残る名乃光里、清く雪は花 周山子

嵐雪先蹤の遊と予

産年序と同一と云

と今追集の終り

以て之と云ふ由縁

やん

國府市

同一霜ゆじや生死乃爰現 竹母

むうし〜嵐雪といひ〜花傍海を
やま〜鳩根の産る我阿ま〜以人〜
予京都の下向せ〜時駒込の境よま
うの花をわき水とよむまて

摺〜とて花よ花あま名対面
と一考と結〜と降〜ぬこの人湯病の
沖流よぬの花表と寄附〜服部
奮助と彫付〜は文字ハ今よめり
ふ今年〜や今回忘とま〜り

福良花雷文字改

名乃雪よ初の花字付て手向哉 花來

懐舊

福良

積菴は極〜降〜小云哉 守中
散沙れ云葉照懐を時重 寒山
まの河由は今と〜〜 拾得

遠忌

同

吊〜之〜ひ〜神波〜〜 儿桂
雪の日は一際高〜鈴乃音 芦仙
言れ葉と流〜手向人表の花 蘭水

雪中菴翁ハ流庵ノ一
今六十回ノ遠志ニ由是ハ
石碑ニ沙汰風ノと比一
尚數千里ノ高

福良

沙汰翁ノ葉此乃飛風ノ道 可候

楓と楓や草の庵にびり
と思ふハ

不十子こや支の子此片所各

雪中庵翁常先を云
方ありしもとや不十子
乃ねと溝りと聞て

同

けりや揃て清き日向ゆき 素遊

雪中菴主翁の事を云と聞て
不肖も人を去る程も聊
と向せん

同

不十子ねん是冬乃日跡ノ舞 雲浦

嵐来て程あり久河亭雪の池 一亭

都鄙まうくと知ルやけ目一 芋魁

故人雪中菴主翁を没する
世と捨諾しとや人の界は
仍り今事既不十子今雪泥ハ
小子新酒と思ふて吊四の
客よりうんとに公考とのほ
と記と考てとまらる

沙雪乃自向は石へ落因ふ 福良 紫雲

雪中夜草翁五十歳と仰て
又歳よりと備ふ

同

その人を同へと獲りき日勝 雲燈菴

幸を忌

同

名は清く四方へ配りや梅枝 梅枝

雪中夜草翁の辞世と仰て

同

散て後と乃云の葉と自向ふ 百海

懐 齋

も人へ届いて自へ冬至毒 同 珍露

懐 齋

國簡

むと子乃力をかり証の香 同 竹葉

かき人れ昔は念や一し 同 芦笛

み十子思ひ出さきし 同 如仙

拾拵や風乃俊の甲斐もさ 同 過休

虚に居て風流は漂ひ空を捲く
飛練をふりて泥濁らうとくや竹久
聞く雷中菴のまゝ蕉門の折歌よ
してとらふ四海より今や
み中身の里を表はり来てるる後
賞州乃二子や市人よ流を母とれ句
成求むされハ此道の意は甘きと
以て灌くうとく美草乃傳燈
物多きは市とく本活と博く
進賢は途よ口すさむりの如く

湊浦

澄りて此都と主教ふ十子

祖月堂

世をかくて之藏の法門を示しり
くも難葉の二き若く廣まり泥ふ
明心居士きて正風此雅頌芭蕉翁よ
盛んありそれの中よ其嵐の二子
ハ初より泥濁らうとく折歌よ倦
は道乃いされとて四海に擴充して
川の流も静き浪もいと清く
澄り陰浪の水に縷と流すの時を
治て世にたまはるもその徳と重
りり申すあまふ今や聞雷中菴
ふ十子の海にまるとに由りりとして
苗裔たる貫州乃二子毫と揮て

流母士の一向と求め世々の中へ
 物も深川乃精舎の一向の人
 分れを神を月乃光りもは
 散一葉吐一花と吹くもか
 いと心易く一集とあんとこ
 風雪の風の風雪は長く傳
 へん人々をくう架

五十の雪よ自よや頭陀袋
 墨江火

湊浦

懐舊

湊連中

五十の雪よ自よや頭陀袋 百丈
 消ぬ名やびりしと今又雪の園 収里
 五十年此今と句ひ川去乃花 芦鴻
 野も山も浅ぬや向や六れを 其滴
 歩は石乃嵐よ力じ雪佛 津之
 雪乃花今五十年や歸り候 茶漏

六乃花ハ嵐の底ニ物ヲ以テ
八十季のきよみれを向も風雅
の色動しく雪中巻の糸を
貴世と評せしと予も拙き
一白成るあはきれとよ道徳

伊賀利

清くまじくしるまに先る時面哉 雲十

嵐雪翁の事やのこより
こまこまはつて展轉し
予と知る人よとせしを
妙典の品号とてしりて懐旧

郡家

八十季や清喜の始り人時由 詮洛

幸忌

朽ぬまの日向も咲や帰る花 阿那賀 青苔

羨もしくや粟又炊く同を枯柳 廣田 悠山

解て降ぬまて解りハ雷
より名を評ししと評
うつくしいふく笑し

夢消して結ひ事とや初時由 委文 子羅

懐旧

解の銘もきよみ八十季初時由 雲曉

小風大報れいあしへ吊
意言外よあまうて
掃寺

玉碌ひひし乃雪をぬる月
文山

雪中菴次醒名ハ字ノ痛ム
考て印成於五十年ノ及
百五ノ神ノ祭所ノ有る
寺々々々

司

ひし若れ照く今ハけむり
環國

志

杉田

初雪や冬の山に水
南水

世に後以道と照とや教紅葉
厄媒

大核並

嵐雪公報と赤武の撰客
殊に此道の龍馬泉下
八十進れ今千里ノ

好士を後也

都志

片に縄武系流乃時多ふ那
觀柳

去癸酉京都行歸の別苑雪と
結あひて西武菴と名を流活乃
帝被翁のひしし活字碑是

駒... 寄... 寄... 寄...
... 寄... 寄... 寄...
... 寄... 寄... 寄...
... 寄... 寄... 寄...

摘多...

片田

受... 居... 見... 一... 意... 一... 帰... 之... 祀... 春橋

阿陽之部

嵐雪居士
八十一年忌此牌

び... 思...

蓮女房

帯雨

い... せ...

十月十日...

懷舊

月浪菴

厝山

世乃海

小芸之好

穠之那

遠忌

玉井菴

蓮丈

寒梅乃

散之好

入十

懷舊

北江軒

幾々の来此途忘や人の帰る處 一步

遠忌

言乃葉と葉とてたぐや雲の殿 来雲

冬れ山々我又世と我 滯いふ 陸車

初雪や花乃風れむくく 初鹿

片脛乃屯やふ十の冬乃雲 風律

忘とめや今も小まをれ十之秋 十泉

皆是むり四十九年の帰る處 調白

風まじみ存るくく 繩 養 米五

瀆乃方まきくと追や枯柳 米仙

嵐雪翁ハ流波林の
洞兄あまは、まゝ又凡
ちゝちとにむすり

いせ冬の神在鳴門の旅居り 井鯉

うは梅のぬ人のあじふ雪れ跡 揚之水

けふや花乃嵐の夏乃あと 博我

非也

嵐雪翁乃句

相撲より並み秋のかり綿

とあつしを思ひおろく

如冠改

香花乃華もや花れかろ綿

潮鼠

あふれたる花を

志句連

國乃名も共々嘆下る

全

孝忌

穉氣との道ふ沙汰や牡丹

青羅

葉乃花やまゝと見え世は人ごと

何龍

又とりよ面釈るまゝ一帯佛

音機

嵐雪翁乃六十回

追福よととまけつらぬ

記念とく沙汰云葉とるに

安吉

まぬむしつらぬ人ごと

懐舊

黒寄

五ツ十ツ何多しの廻り

式行

行詠乃一葉外咲や小峰山

高嵩

尊陽

門前之松さうくして我門より手前風雷
ありと翁の云の葉より思ひよせて

四軒家町

名のこ峰雪と仰り流秋津水 市諷

一葉散て形や、云乃禁れちり流、 看牛

芭蕉吹嵐乃幸あり夕付る、 魯洪

東路の時雨や夏のみ十季、 儿鶴

兼山花れ今やむくし此碎心、 三千尺

時雨より名の深川のふ十季、 梵龍

去者日以疎しとは小人乃
くくもや我門の宗歌として
之都より名と云れりまこし一是
晋子先賢風を宿酒聖非り
今まいそしめ遊者自れりし
今こて笑席別物見の柳葉
と憧憬し流す名を

白くはらひのこ

同所

一葉吐あけしや幾代流るる 熙玄

遠忌

前書畧之

同所

名の雪は消ぬる寝やふ十季 眉月

名木のむらうと思ふ小松の如 不津 文朝

藿香乃土うら藿香小春外 白地村 支山

海ききしりの草もや水仙花 白地村 亀舟

遠忌

阿多きり石碑のまよ色香味 黒寄 木印

嵐雪のよハ後陽小松色の人
きりうらうらうとて時移り
まよと申しはうらうとては常

淡雪やふ十忌は瀾伽の水 同 任風

此ハ貫と州とは平ノ猶子なり
其祖嵐雪乃瀾伽菜少ハ流るハ
酒ハ聖よるをハ一沈の虚宴と
醜ハ未れよふ十忌ハ星を夜
後乃駒のくやう成感分繋るハ
我も下流よ遊ハ風地の色と
吟出テ辨入リ改テ白雪れ方ふ
依ハも同縁れハ一とせ茶よ
捨リハ此流るもよ東中うら
吞込ぬ亂はき時知る此を
考ふるもせよ和民ハ壁ても
別は例ハ流ハ美なる帰る

左 兼 中 卷 蕉 心 登 其 其
 面 貌 の 終 を あ げ 文 八 唐 の
 王 維 う ぶ づ 人 と い へ ば
 一 夜 の 戲 座 を 常 々 竹 を
 毎 日 と せ 修 えて ね じ ぎ
 自 画 賛 と せ ぎ 二 画 の 心

雪 高 一 尺 向 の 飛 脚 五 十 川 白 音



上
 其 女 危 一 動 ぬ 竹 乃 財 由 哉 白 音

秋教四季

傾城乃をぬ日もを澄聚於 白音
灌佛やゆひさふ不筆此先キ 全
白毫のひとら酒りや秋乃空 全
臘ハや秤乃星是世れ光里 全

東武之部

歌仙

門人よ其角嵐雪と
をてしうとと我ふと思ひて

初冬や暮山人獨り花乃兄 鳥醉
雪うり後を於るまの山 虎州
運ひ来ふ鶴乃藤是れ家ゆゑ 童牛
多しと子ののハいとぬ 花溪
題して書生れ文を存乃照 杉雲

秋来ても又鉢の一ツ葉 鼠麥

秤目乃寄聲よらるるに葉のよあ 百卉

来れ合ふあつて仲人の何れ 深魚

温泉北山を叫く首尾と暮の月 暮江

鳥をたれ周ふ動幅の飛ぶ 徐来

筆よ戒破くらく盗くして女羽橋

養の借えよ加賀の道め 白水

流石をたれ画をよふ静き屋の底 如林

踊乃癖の端よ居るなり 花光

浮ぬく清てハ水ととさゆき 烏墨

軒ををらりて芳るる以松 芝明

送言の篇と自たのたの塵 時来

源氏の好もやうひ喟れ 儿杖

鞆鞆よ山守播り候と又えぬ 鳥呼

芳くよとくまらるる名傍の旅 巴石

乃々家れ中よ筆書きてあり 琴江

縹て居るうぬ翁夢の觸

瓢船

沖代の杖の滑きよかこゆり

夕語

誰かあまうて發へ生え葉買

菊道

悪風を如田に破るう羽ふ夕を

百鷲

白服心本そよば夏と遊ぶ

鳥扇

奉公と葉の風の夏乃葉炊く

如扇

やろ馬をう月よ又遊ぶ

友吾

捨て子乃葉ひよ足とほかろ

素竹

鐘濤乃葉と志とこの鐘

平礎

汲る水以次成油よなり

燕浪

松乃あまうを裾よ風持ッ

至涼

沖流はほもるに流る久入

賀雪

捨つて舟乃色ハ我よ似る

鳥明

幕巻のことし花をけあえ

尤明

散る一葉乃又芽を付

坐隠

遠忌

風ふみうり乃花や種瓢一浮

常駿院

法苑經の鳥と名て啼り帰花 今

懐旧

りら共上塵一ツちし終海 浮涇

風乃末世の音し寺乃查 浮来

佛系乃花又心やうし孝花 市我

七文字法乃の向や神の爲に 陸我

世と去て名を折せしや枯庵花 町居

今と教傳れ本の紫の光り小 一聲

五十の夏の光と聞けぬ小 喜風

名暖くをゑり生ら夏光法の花 花雀

州枯乃中よの向の花の小 律人

風折く空と小を法華経 律山

懐舊

師乃愛也圓以河句と又十年

李逸

元宮三朝の冬十回と年

後以是れ中も子向也一時响

仙朝

寒之菊よかきも七世海は六

東水

觀誹道の猶世と盛

五十年け月雪と跡は骨

永龜

跡は跡もや高橋乃寺は霧

蓬閣

徘徊も古風を雨は帰苑

趙支

自向も少はれ小春は桃梅

立笑

古き名乃も列し三も小春

隣笑

竹たむ風雅もは此重さ

二調

嵐雪の懐旧

何ゆこれ後と降名や又十年

艸叟

雪中巻と予うた又と
忌日等しきと八

冥加あせた人我を此雪佛

芳竹

今丙子此小春は之入陣
雪中菴主の六十年回
あつて神向と振つて
只懐旧のこ

ゆつたや雪此小春と平子 環山

遠忌

橋よ香城拾らん 妙所ぬ 中和

門人又其角菴雪ありと
翁の懐せしこと

又十年一度眺るる花 湖十

嵐雪翁とて又十年の昔
柳よせして

五十年葉を絶として 教柳 買明

雪中菴五十年周遊者
自習此翁と車馬や花の思と
いふは思ひては淡州河原の
服部氏より

車馬を家の廻りや冬橋 平砂

懐舊

半白乃子や積りて所就海 有仇





